

# 学校図書館を活用した国語科授業の創造

—ファンタジー作品を中核にして—

## Creation of Japanese language classes using the library

—Focusing fantasy books—

長谷川 栄子・松田 智子

Eiko HASEGAWA Tomoko Matsuda

### 要旨 (Abstract)

平成 29 年に告示された小学校学習指導要領国語科においても、学校図書館の活用が示されており、さらに各教科・領域との関連性が求められている。国語科の読むことの領域において、言語活動例に学校図書館などを利用して、学び合う単元構成が求められている。そのためには、主体的に本を手に取り、作品や自分、他者と対話しながら読む読書行為ができるよう国語科において授業を創造したい。

そこで、学校図書館を活用した国語科授業をどのように実践するのかを検討した。このような国語科授業を実践すると①自分の考えをまとめるために必要な図書を再読する、②自分の体験と重ねながら読み、作品や作家、仲間と対話して読む、③文字言語による表現だけでなく、音声言語による表現へ意欲を高める、というような読書行為における児童の変容が見られた。今後、学校図書館を活用した国語科授業を創造しようとするとき、各教科・領域における読書指導などとの関連を考慮した年間指導計画の作成と児童用図書のみならず、教材と関連する資料をどの程度蔵書として学校図書館に置き、情報センターとしての役目を担うのかが、課題となる。

**キーワード:** (学校図書館の活用) (国語科の授業創造) (読書行為) (ファンタジー作品)

### I. はじめに

まず、小学校学習指導要領における学校図書館の位置付けについて、平成 20 年版と平成 29 年版を比較する。

平成 20 年版の小学校学習指導要領 第 2 章 第 1 節 国語 第 3 指導計画の作成と内容の取扱いにおいては、学校図書館の利用に関しては、本の題名や種類などに注目したり、索引を利用して検索をしたりするなどにより、必要な本や資料を選ぶことができるように指導するよう記述されている。本などの種類や配置、探し方について指導するなど、児童が必要な本などを選ぶことができるように配慮することとされる平成 29 年版よりも具体的な指導が浮かびやすい。平成 29 年版は、解説において同様の記述がある。

本の種類や配置、題や目次、索引を使って本や調べたい内容を探すこと、学校図書館に設置されたコンピュータの検索機能を使って調べることなど、学校図書館をより効果的に利用するための学習や本や資料を使って調べる学習の基礎・基本の学習を系統的に行う必要があることを示している。ただ、これらの学習内容については、学校や教師の

自主的な研究に任されている。学校図書館司書補などと協力しながら独自に工夫する必要がある。各教科・領域における読書の指導や読書週間などに行う全校一斉の読書活動と併せて、年間指導計画を作ることが今後の課題である。

平成29年版小学校学習指導要領 第1章 総則 第3 教育課程の実施と学習評価 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善においては、学校図書館の活用が、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善となることや地域の図書館との連携について触れた点が新しい。

また、平成29年版小学校学習指導要領解説国語編において、学校図書館は、3つの機能を有することを述べている。即ち、児童の読書活動や児童への読書指導の場である「読書センター」、児童の学習活動を支援したり授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」、児童や教職員の情報ニーズに対応したり児童の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」である。また、読むことの領域の言語活動例に、学校図書館の活用を行うことが、明示されている。説明する活動や報告をする活動においては、相手が必要だ。学校図書館を活用し、学び合う単元構成が求められているのだ。

そこで、本稿では、子どもたちが手に取りやすく、楽しく読み進めることができる物語、とりわけファンタジー作品を取り上げて、学校図書館を活用した国語科授業を創造することを検討する。

## Ⅱ. ファンタジー世界から広がる想像力

### (1) 舞台や道具

児童文学の中でも、とりわけ不思議な世界が構築する作品世界を味わうことができるのが、ファンタジーである。ファンタジーは、実際におこりえないことを、まるで目に見えるように、小説として創造してみせる文学(三宅・島・畠山1983)と規定されている。ファンタジー作品では、不思議な人物、時、空間などが設定される。重要な役割を果たす舞台や道具を基に作品を表1に整理した。

【表1 ファンタジー作品における舞台・道具】

| NO. | 舞台・道具   | 作品   |
|-----|---------|--|
| 1   | おもちゃ・人形 | A. A. ミルン・E. H シェパード絵『くまのプーさん』石井桃子訳、岩波書店、1968年<br>D. マリノ『ふわふわくんとアルフレッド』石井桃子訳、岩波書店、1977年                                    |
| 2   | 動物      | ケネス・グレーム『たのしい川べ』石井桃子訳、1963年<br>ヒュー・ロフティング『ドリトル先生アフリカ行き』井伏鱒二訳、岩波書店、1978年<br>斎藤敦夫文、藪内正幸絵『冒険者たち』岩崎書店、1982年                    |
| 3   | 魔女      | E. L カニグスバーグ『魔女ジェニファと私』松永ふみ子訳、岩崎書店、1989年<br>E. G. スピア文、寺島竜一絵『からすが池の魔女』掛川恭子訳、岩崎書店、1969年<br>イーデス・ネズビット『砂の妖精』石井桃子訳、角川書店、1990年 |
| 4   | ドラゴン    | K. ヴィーゼベグ文・レーモズ・キッセ絵『レーネとドロムレ』村井誠人訳、ビネバル出版、1993年   |
| 5   | 館       | L. M ボストン『グリーン・ノウの子どもたち』亀井俊介訳、評論社、1972年<br>フィリップ・ピアス『トムは真夜中の庭で』高杉一郎訳、岩崎書店、1975年  |
| 6   | 時間      | アリスン・アトリー『時の旅人』小野章訳、評論社、1980年  |

|   |      |  |
|---|------|--|
|   |      | K. ピアソン文、葛西敏行絵『床下の古い時計』足沢良子訳、金の星社、1990年                |
| 7 | 古代世界 | たつみや章文・東逸子絵『月神の統べる森で』講談社、1998年<br>萩原規子『空色勾玉』徳間書店、1996年 |

これらのファンタジー作品は、その構造である現実世界と非現実世界との行き来の仕方から、①現実世界⇒非現実世界、②現実世界⇄非現実世界、③非現実世界⇒現実世界、非現実世界に分類することもできる。現実と非現実の出入りを自由に楽しむ柔軟性を持つことは、想像力によるところが大きい。

ファンタジーは、たましいのあらわれであり、読書の中で、孤独が癒され、隠された自己に気づく（河合隼雄、1996）とされるように、ファンタジー作品を読むことは、自己との対話でもある。

## （2）ファンタジーと子どもたちの想像

では、ファンタジーによって子どもたちの想像がどのように広がるのだろうか。

まず、読者は、細部にまで綿密に描かれた非現実の世界が背景にあるからこそ、その世界に惹き込まれ、その世界を想像しようとする。書き込まれた表現からその風景、人物、生き物、道具の細部を思い描く。さらに、書かれていない事物についても思いを馳せ、自分なりの非現実の世界を創り上げる。子どもたちは、時間や空間を超えることで想像力を発揮する。

ファンタジー作品を学校図書館の書棚から手にしようとするとき、題名を読んで、その世界や主人公、を想像する。冒険のワクワク感を生じるのだ。

ファンタジー作品の中には、民話の要素でもある3回の繰り返しの技法を取り入れた作品がある。このような繰り返しは、次に登場する出来事や主人公の行動や会話を予想して読み進めようとするので、想像力を培うことになる。

登場人物に同化して読み進めるときには、作品の中で登場人物と探検をしたり、自由な遊びを活発に行ったりする。これまでも、子どもたちは、幼児期の遊びにおいて想像力を大いに発揮してきた。作品に登場するぬいぐるみ・人形などは、この空想の遊び友達である。ファンタジー作品になると、動物や個性あふれるキャラクターと一緒に活動するのである。

また、ファンタジーには、遊びだけでなく、動物と人間が交流し、非現実世界を楽しむ作品も多い。自分の秘密や悩みなどを気兼ねなく話せる友達が存在することの大切さが、感じられる。人間関係の構築に心砕く今の子どもたちにとって、心の友は、いつの時期にも必要だ。読書を通して、心の安らぎを得、ありのままの自分に気づき、認めることになろう。子どもたちは、想像を広げ、内的世界に働きかける読書行為を行っているのだ。

さらに、現実世界と非現実世界を対応させ、非現実世界から一般化されたメッセージを受け取ろうとして、想像力が働くことだろう。現実世界を批判的にみる視点を与えられる場合もある。その過程において、子どもたちの心の成長が、図られる。ファンタジーの世界から、現実世界に戻って来てこれからを生きようとするとき、希望や意思をもっている新しい自分に気付かされるはずである。

このようなファンタジー作品を教材として用いるときには、その特性や価値を生かした読みができるように、次の4点に留意して単元構想をしたい。

第1に、ファンタジー作品を丸ごと味わい、ファンタジー世界に浸るためにも、短編集全体を読んだり、長編作品を読んだり、多読したりする読書行為を行いたい。教科書では、短編しか掲載されない制約がある。子どもたちの読書を読書行為力・読書生活力に高めていくことを視野に入れたい。

第2に、作品構造を意識させた読書を行いたい。子どもたちは、幼い時には、無意識に現実世界と非現実世界とを

行き来している。しかし、メタ認知の成長と共にファンタジー世界から現実世界を見る視点を得るようになる。ファンタジーの入口・出口を見つけることは、作品構造を捉え、子どもたちが作品世界に参加する手掛かりになるのである。

第3に、個性化を図るために、子どもたち自らが、表現様式を選択し、工夫できるようにする指導が必要だ。ファンタジーにも様々なテキストがあり、子どもによって相当違った好みや読書傾向がある。また、読書活動として単元の終末に行う表現活動は、多様な表現活動を取り入れるようにしたい。

第4に、ファンタジー作品を中核教材にして学習した子どもたちの作品を相互評価させたい。それによって、多様な非現実世界があることのおもしろさに気付くと共に自己を対象化することができるからだ。

### (3) ファンタジーの授業アイデア

次に、ファンタジー作品を中核にした国語科授業のアイデアを5つ列挙する。

#### ① 不思議の世界へようこそ

ファンタジー世界を読んで、登場人物（動物・植物）図鑑作りをする。作品に登場する人物の性格、具体的特徴、服装、住んで居る所などを説明するモデル学習を行う。次に、その非現実世界に住む登場人物を創造して図鑑に付け加える。

#### ② 作品構造を捉えて、物語を創作しよう

キャラクターを設定し、物語構成を援用して、短編を創作する。ファンタジー作品から非現実世界への入口・出口の工夫を捉え、設定する。キャラクターと道具の組み合わせの面白さ・事件の不思議さなどは、学年に応じて指導の重点を変え、創作する。作品は、お話の会で語って交流する。

#### ③ 願い事が、半分かなえられるとしたら

一つの願い事をして、願い事は、その通りにはならない。半分は、願い事通りだが、後の半分は、予想外の事が起こる。そこには、願い事と現実とのずれや事件を考える面白さがある。柔軟な心の在り方を探ってみる。

#### ④ 不思議な世界の1年を表そう

作家が創った非現実世界や自分が創造する国の1年間の自然や生活の様子を絵と文章で表す。カレンダー、すごろく、絵本などにして創作を楽しめる。グループで作ったカレンダーを各教室に配布するのも楽しい。

#### ⑤ 想像の世界の自分は

日常の自分とは違った自分があるに違いないと、どこかで思ったことはないだろうか。こんな自分だったらなあと想像して文章を書くうちに、人のもつ多面性に気付き、自己理解を促す一助にしたい。

次に稚拙な授業実践ではあるが、宮沢賢治「やまなし」を中核にした筆者の授業実践を取り上げ、子どもたちの読みを考察する。授業アイデアとしては、⑥作品テーマから考えたことを記録冊子にまとめようとなる。

## Ⅲ. 読者としての子どもを育てる

### (1) 単元の構想

#### ① 単元名 人が生きるとは

#### ② 「人が生きるとは」を問いかける

阪神・淡路大震災は、芦屋の地も揺り動かし、大きな被害をもたらした。山側に位置する地区は、被害は少なかったとはいえ、子どもたちは、さまざまな体験をすることになった。

家具の下敷きになって、家族に助けられた。多くの人々が亡くなった中で、生きていることに感謝した。自然の巨大な力を感じ、人間の小ささを知った。ライフラインが断たれたために水波みに並んだ。そして、日頃の生活の中でどんなに無駄をしていたのかを知った。祖父母の家に疎開をした。その中で、家族の結び付きが強くなり、そのぬくもりを感じた。疎開により、友達がばらばらになる中で、友達を思いやる自分を知った。新しい土地での親切が嬉しかった。見知らぬ人々からの援助に感謝した。人と人が支え合って生きていることを身にしみて感じた。そのような体験をした子どもたちではあるが、まだ自分自身の問題として十分に受け止められていないわけではない。震災以降の体験や思いを資料と共に整理をし、自分自身を見つめ直し、「人が生きるとは」を自分自身に問いかけて考えをまとめさせる。貴重な体験を自己の成長に生かし、卒業に向けて自己を見つめていくきっかけにさせる。

### ③ 作品を通して自分自身を見つめる

文学作品を読んで、作品の題名に込められた作者の思いや作品の主題について考える。登場人物に同化して読んだり、同じような主題を持つ作品を読んだりすることはよくある。しかし、読書をきっかけにして、自分を見つめ、まだ考えもしなかった世界に目を向けるような読書経験は、数少ない。文学作品の中に読書が終わるのではなく、自分自身の考え方や成長に返っていく読書生活をさせたいと思うのである。

「やまなし」は、宮沢賢治の心象風景を描いている作品である。青い2枚の幻灯、そして、小さな谷川の青い水底というように青の色が作品全体を包み込んでいる。また「二重視」（吉本隆明）によって表され、賢治の豊かな表現方法によって夢の中の世界のような美しさを感じさせられる。

宮沢賢治は、自分自身が愛したものや「ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふこと」を作品に盛り込み、「人が生きるとは」と作品の中で問いかけ、自分自身の悩みを作品に表している。宮沢賢治の「人が生きるとは」を論点とした作品を子どもたちが重ね読むことによって、「やまなし」における生と死がより明確になり、自分自身の体験と谷川の水の中の世界と重ね合わせて読んでいくことだろう。自分自身を見つめる契機をつかみ、「人が生きるとは」と問いかけることができるのではないだろうか

### ④ 教材

#### ア 教科書教材

「やまなし」宮沢賢治作（光村図書）

#### イ 共通読書作品

「注文の多い料理店 序」『注文の多い料理店』ポプラ社文庫、1980年5月

「よだかの星」「虔十公園林」『新版宮沢賢治童話全集』岩崎書店、1981年1月20日

#### ウ 選択読書作品

他の宮沢賢治作品

#### エ 冊子作り資料

地震関連の各紙から約15の新聞記事

「宮沢賢治」宮沢賢治記念館

『写真集 宮沢賢治の世界』筑摩書房、1994年12月15日

### (2) 単元の指導目標

- ① 複数の作品を重ね読み、作品に込められた「人が生きるとは」という問いについて考えることができる。

- ② 自分の体験を通して作品世界を深めることができる。
- ③ 体験した出来事を通して考えたことを記録にまとめることができる。
- ④ 情報交換をし、各自のテーマに沿った情報を収集することができる。

## (3) 単元の指導計画 (全16時間)

| 次 | 時  | 目標  | 学習活動   | 指導上の留意点   |
|---|--|---|--|---|
| 一 | 1<br><br>2                                 | 1 震災をきっかけにして、人が生きていくことについて考えようとする意欲をもつことができる。<br>2 「人が生きる」との冊子を作ろうとする意欲をもつことができる。 | ① 震災時の友達の詩や家族についての新聞記事を読み、その当時の自分についての作文を書く。<br>(ワークシート1)<br>② 震災後の生活の中で考えたことを話し合い、人が生きるとはの問いかけをもつ。<br>(ワークシート2)<br>③ 既習の戦争文学を思い出し、人々が生きていこうとする姿勢を確かめる。<br>(ワークシート3)<br>④ 学習課題を設定し、学習計画について話し合う。<br>(ワークシート4)<br>⑤ 冊子の目次、構成、資料について話し合う。                    | ○ 地震は、生きていくことについて考えさせられる大きな出来事であったことに気付かせる。<br><br>○ 力強く生きる人々の姿に共感させる。<br>○ 共通資料と個人資料を確認させ、進んで資料集をしようとする環境作りをする。              |
| 二 | 3<br>4<br><br>5<br><br>6<br><br>7<br><br>8 | 3 宮沢賢治の思いについて考えることができる。<br><br>4 物語の世界に浸り、自分なりの論点をつかむことができる。<br><br>5 作品世界を想像豊    | ⑥ 宮沢賢治の作品を思い出して、粗筋を発表する。<br>⑦ 共通作品を読み、主人公が問いかけるものや自分の考えをまとめる。<br>(ワークシート5・6)<br>⑧ 「注文の多い料理店(序)」を読み、賢治の作品に対する思いを考える。<br>(ワークシート7)<br>⑨ 「やまなし」を音読する。<br>⑩ 谷川の情景や作者像に着目して第1次感想を書く。(原稿用紙800字)<br>⑪ 論点を整理し、感想を交流する。<br>* [冊子の目次の推敲をする。]<br>⑫ 題とやまなしを関連付けて、自分の論点 | ○ 読書記録を参考にさせる。<br><br>○ 一人一人が想像する世界を大切にさせる。<br>○ 幻灯の雰囲気に入り、作品を味わわせる。<br>○ 新出漢字や読みにくい漢字を指導する。<br><br>○ 時の移り変わりの中で5月と12月を捉えさせる。 |

|   |                            |   |   |  |
|---|----------------------------|---|---|--|
|   | 9                          | かに読み、作者の代に込める思いについて考えることができる。   | からやまなしを読む。<br>(ワークシート8・9)   | ○ 色彩や会話を手掛かりに情景を想像しながら読ませる。<br>○ 宮沢賢治の作品を通して、生きることをどう深めたかについて考えさせる。  |
|   | 10<br>11                   | 6 複数の世界から共通の論点を捉えることができる。   | ⑬ 読み深めたことを話し合う。<br>⑭ 今まで読んできた作品を通して自分の思いについて話し合う。<br>* [冊子のテーマや目次を再検討する。]<br>(ワークシート10)   |  |
| 三 | 12<br>13<br>14<br>15<br>16 | 7 資料の取捨選択ができる。<br><br>8 9ヶ月間の流れをつかみ、自分自身を見つめ直すことができる。<br>9 考えを発表し、論点を深めることができる。 | ⑮ 集めた資料を交流する。<br><br>⑯ 資料の効果的な表題の付け方を学ぶ。<br>(ワークシート11)<br><br>⑰ 資料を時系列に整理し、表題を付ける。<br>⑱ 震災を通して考えたことを書く。<br><br>⑲ 「人が生きるとは」の項を中心に考えを発表し、話し合う。<br>(ワークシート12)<br><br>⑳ 冊子を互いに読み合い、評価をする。<br>(ワークシート13) | ○ 出来事の節目を捉えさせる。<br>○ 写真集を参考に、思いを込めた表題を付けさせる。<br>○ 工夫点を交流しながら、より良い冊子になるよう仕上げさせる。<br>○ 改めて思ったことや人が生きていくことについての素朴な疑問を大切にさせる。<br>○ 考え方の違いや共通点を知り、疑問点は、今後の学習課題として残しておく。 |

(4) 実際と考察

① 「人が生きるとは」という課題

第1次は、「人が生きるとは」について考えようとする意欲をもたせることが課題となる。「人が生きるとは」について考えるための導入として、(ワークシート1・2)を使って、震災当時の生活の様子や震災後考えたことについて発表させた。

学校再開の時には、お互いの無事を喜び合ったり、怖かったことを話したりなど、話の内容が事実の羅列にとどまっていた。しかし、あれから9ヶ月たつと人の気持ちについて触れる発言が目立った。ガス工事に携わる人々の苦労を思いやったり、労働の大切さを感じたり、知らない人に話しかけられた時のほっとした気持ち、報道番組を通して感じる怒りなどが随分とたまっていたかのように子どもたちの発表が続いた。

次に、既習の戦争児童文学教材を思い出させ、主人公たちがその後どのように生きているかを想像させること

によって、力強く生きていこうとする主人公の姿を意識させ、被災地の人々の姿と重ね合わせさせた。(ワークシート3)すると、「亡くなった人の分までわたしたちは生きなければ。」という新聞記事に掲載された被災地の人の言葉を引用して発言する子どももあり、命の大切さを感じたようである。

そして、人が生きていくことについて問いかけ続けた作家宮沢賢治を紹介し、体験して考えたことについて作品を通してさらに考えを深め、記録冊子にまとめていこうと意欲をもたせた。これまで説明文教材で学習したことを書き表してきただけに子どもたちは「もう任せといて。」と言うくらい担任の心配をよそに自信をもって望めたようである。単元を通して意欲を持続させ、高めていくために学習計画を立て、見直しをもたせることにした。(ワークシート4) 子どもたちは、次時から早速、地震に関する本、雑誌、写真などを自ら教室に持ち込んで見せ合い、授業の初めに震災に関する話を数人が発表してから授業の課題に向かうようになった。休憩時間の話題にも取り上げられ、これまでになく、自ら学習に向かおうとする姿勢が感じられた。

## ② 「生きる」という問い

第2次では、記録冊子をまとめる論点を「やまなし」や「生きる」を論点にした共通読書作品を通してつかむ学習活動を行った。

ア 「やまなし」の世界に浸るために「注文の多い料理店 序」を読んだ。子どもたちからは、①賢治は、自然が好きな心の優しい人だ。②賢治の住んでいる所は、自然がいっぱいある。こんな所に行ってみたい。③自然からお話をもらってくるなんて想像豊かな夢のある人だ。④自分自身で分からないことを書いているなんて不思議な人だ。ということが挙がった。(ワークシート7)

イ 「やまなし」を読む際に、幻灯の世界の雰囲気味わわせた。「雪わたり」の中でも賢治が書き表している11歳の入場制限ぎりぎりの子どもであることを知らせ、夢のような世界を楽しもうと呼びかけた。次に、カメラの視線が、水面から水中へ、そして、水面を見上げるように移動するビデオを見せ、「二重視」の視点を与えた。そして、青いスライドを映し出し、二枚の幻灯を意識させた。

それを背景にして、「長岡輝子のカセットブック」による範読を聞かせた。その朗読は、子どもたちにとっては、蟹の親子の雰囲気がよくつかめるものであった。この後、作品に対する思い入れを高めるために班での朗読を授業の導入に行い、子どもたちは、音声表演を楽しむことになった。「やまなし」(物語テープ出版、間宮芳生作曲、1994年)のCDの音楽をBGMにして助けを借りると、5月と12月の雰囲気をさらによくつかむことができた。

ウ 第1次の感想文(原稿用紙800字)を①谷川の世界を想像豊かに読む。②作者の思いに触れながら読む。を課題にしながら書かせた。「注文の多い料理店 序」の助けが大いに効いて、都会の子どもたちながら、自然の中に溶け込むように読むことができたのには、感心させられた。①谷川の様子について「とても水が澄んでいて、人もほとんど訪れることのないとても静かな場所だ。周りは森で、季節の移り変わりを木々の葉の色づきで感じるができそうだ。登場するものから流れの速さ遅さを感じられる。意味の分からない言葉も出てくるが、賢治も言っているように自分で何となく想像できそうだ。」②蟹の親子について「お父さんは、やはり大人で何でも知っていて、子どもに知っていることを伝えようとしている。蟹の兄弟たちのやり取りは楽しく、自分の兄弟げんかと比べてしまう。弟のわがママをよく聞いて優しさを感じられ、僕と違う。月日は経っているが、やまなしが落ちてきたときにかわせみを思い出して怖がっている。それほど、かわせみは、怖かったんだ。」③題について「どうしてやまなしは12月の後半にしか登場しないのに、題になったのだろう。」

④作者について〔賢治は、本当に谷川の中に小さくなって潜ったことのあるように書いていて、想像豊かな人だ。かわせみは、死をもたらし、弱肉強食の世界を表している。〕

エ 感想交流（座席表に一次感想文の要約を書いたものを配布）をし、前出の4つの論点を整理するために印をつけながら聞かせた。それを受けて、自分自身が読みを深めていく論点を決め、5月と12月の場面をひとり学習させた。（ワークシート8・9）①谷川の様子について〔色彩やたとえの表現方法を手掛かりにして読む。蟹の親子の会話を中心に読む。〕②題「やまなし」についての2点に絞られた。読んでいる途中に立ち止まった時は、もう一度「注文の多い料理店 序」に戻って考える姿勢も見られ、賢治の作品世界を丸ごと受け止めようとする気持ちが表れていた。共通作品をこのように活用し、作品を再読する力があるのだと子どもに驚かされると共に、「序」から受け止めるものが大きいことを改めて感じさせられた。さらに読み進めたことを話し合うと、題についての考えが話の中心となっていく。〔かわせみから受ける印象とやまなしから受ける印象を比べてみると、かわせみが恐怖や死をもたらすのに対し、やまなしは、やさしさ、いきること、夢や希望を感じさせてくれる温かい世界だ。〕

まとめとして、子どもたちが「やまなし」で受け止めた論点①自然の美しさ、②家族の情愛、③生きる、④死 を模造紙に書いた文章構造図を使って整理した。

オ 震災の記録冊子を作っていく論点を捉えさせるために、複数の作品に込められた共通の論点を自分のもとに引き寄せることをさせた。共通読書教材を読んで、主人公が問いかけている表現を視写させ、その表現から考えたことを書かせた。（ワークシート5・6）

次に複数の作品から自分自身が受け止めた論点を意識させるために、自分が考えたことは、フラッシュカードに書かれた4つの論点のどれと結び付くのかをワークシート5・6に書き込ませた。そして、ワークシートに書き表した表現と考えと論点を発表させた。「よだかの星」では、③生きる〔弱肉強食の世界の中で、つらさを感じているよだか。強く生きているよだか。〕④〔ほかから随分ひどいことを言われて死にたいと思っただろうよだか。〕が挙げられた。「度十公園林」では、①自然の美しさ〔杉の木の緑の美しさ。成長していく杉の木の美しさとたくましさ。〕②家族の情愛〔度十の思いを受け止め、支えた家族。ずっとずっと子どもたちにすぎの木の下で遊んでほしいと願った度十の優しさ〕が、挙げられた。この話し合い活動では、作品から受け止めることが一人ひとり違うことがはっきりしたけれども、発表が並列的に終わってしまった。今後の課題として、文章表現を根拠に互いにこだわっていることについて話し合いが深められるよう話し合う能力を高めていきたいと考える。

時間のまとめとして、提示された4つの論点を参考にして、「人が生きるとは」について自分自身が捉えた論点を記録冊子のサブテーマとして書かせた。

カ その論点を受けて、記録冊子の目次を再検討させた。（ワークシート10）学習活動の中で論点があっさりしてくるので、大まかであった目次の言葉が次第に具体的になってきた。時間をおいてモデル学習を繰り返すと、考えがだんだんはっきりしてくる様子がわかる。子どもたちにも考えを膨らませていく時間が必要である。

### ③ 記録冊子作り

第3次では、今までの学習を基に冊子作りを行った。

ア 集めた資料を交流し、さらに必要な資料を交換し合った。本や雑誌、家庭で写した写真を見ては、自然と

話の輪が広がった。このことは、記憶が薄れていくのをもう一度振り返らせることになった。資料の効果的な表題の付け方について、新聞記事を使って練習した。(ワークシート11) 友達と評価し合うことで、自分だけの言葉で書こうとする意欲が見られた。資料のキャプションについては、「宮沢賢治」(宮沢賢治記念館)をもとに自分の思いを込めたものとなるよう指導した。資料を整理して書き込んでいくうちに、子どもたちは、次第に上手になっていった。

実際に作っていくと、一つ一つに凝りだした。時間を忘れて取り組む姿勢からも意欲が感じられた。作業の進行を学習計画表に書かせると、自主的に取り組んでいく様子が見られた。子どもからの相談内容も前向きで、「こんなふうにしようと思うけど、どうかな。」「こんなのができたけど、先生見て。」「家でもやってみる。」ということが見られて、嬉しい思いであった。

- イ 「生きる」について(原稿用紙800字)に表した。その文章構成については、①読者に問いかけること、②体験と作品から考えたことを具体事例として挙げること、③自分の考えをまとめとすることを指導した。大きなテーマであったので、「この時期に6年生なりに考えたことを書き表すことが、大切なんだよ。」と教師の思いを伝え、書かせることにした。無理はさせまいと思っていたが、これまでの学習で、受け止めた論点のはっきりしてきたことが幸いして、集中して書くことができた。

その文章は、自分自身が選んだ賢治の作品や実際に体験したことに基づいて考え、書いているので言葉がとても生き生きしているものとなった。強い思いで書き終わる文章もあれば、人の心について探ったり、書いている間にも自分自身に対しての問いかけが新たに生まれたりする文章もあり、思考の様子がよくうかがえた。このような個性が感じられる文章になったことと、教師の思いを受け止め、考えてくれたことに胸が熱くなった。

- ウ 班で記録冊子を読み合い、相互評価させた。(ワークシート13) 評価は、①テーマと資料の関係性、②思いの込められたキャプション、③5種類の文章表現様式、④「生きる」の作文構成に焦点化した。

学習を終えた感想は、自ら学習に取り組んだ充実感に溢れるものになった。[わたしは、もう少しよくできたらよかったなあと友だちの作品を見て思うところもあったけど、今、満足しています。作っている時は、とても苦労したし、難しかったけど、終わってみると頑張ったと思います。出来上がってとてもうれしい。] [他の人の作品が、一人ひとり違っていておもしろかった。8、9ページも書いている人がいてすごい。みんなも僕の作品を読んでくれてうれしい。] [宮沢賢治のことに興味をもってたくさん作品を読みました。今までは、作品を何となく読んでいたけど、何を伝えようとしているのかを考えながら、何回も読みました。生きるとはという難しい問いを童話で表し、生きていることがどんなにいいかを書いた賢治は、すごい人だ。] [今まで考えたこともないようなことを考えた。今は、生きているなあと思うようになった。人に対する考えが変わった。人って互いに助け合って生きていて案外いいものだ。一人では生きられない。ちゃんと生きていることを大切にしていきたい。]

- ④ 子どもの変容として

子どもたちは、単元を通して進んで宮沢賢治の他の作品を手にして読むようになった。絵本から文庫本まで用意すると、自分の興味に合った本を選択していた。さらに冊子を作り上げるために、共通読書作品を何回も熱心に読んでいた。これほど読むとは、予想していなかった。書くために自ら進んで読んでいくうちに、自分の考えが、次第にはっきりしてくるのを感じ、再読の楽しみを味わっていた。

この実践の後、15分間の児童朝会で「生きるとは」と題し、学習発表をすることになった。宮沢賢治役の男児が黒いマントをまとい、「注文の多い料理店 序」を基に台詞にして登場。ダウン症児と共に数人が「やまなし」の冒頭を暗唱。「生きるとは」の冊子作りで書いた作文の個々の主張を合作詩風にまとめ、クラス全員で呼びかける。音楽とビデオ撮影も子どもたちが行った。

文字言語表現に飽き足らず、音声言語表現でもチャレンジし、子どもたちの創造力が高まった学習活動になった。学校図書館を活用し、複数の作品を読むことが、こんなにも創造的な授業を作ることができるのだと授業創りの面白さを味わった。

#### IV. 学校図書館を活用した国語科授業の課題

##### (1) 学校図書館司書補との連携

何について支援してもらおうのかをよく相談することだ。前出の授業実践を行った時には、子どもたちに学校図書館で宮沢賢治の図書を探させて読ませた。不足する冊数は、芦屋市立図書館で借り、必要な資料は教師が収集し、学級に置いて子どもたちが自由に読むことができるよう環境を整えた。つい、学校図書館司書補に願い出て、宮沢賢治の図書を集めてもらいたい気になるが、子どもたちにどの書架に配置されているのか、物語だけでなく、伝記のコーナーからも図書を選んで来てほしいと願ったからである。それが、自ら本を手取る主体的な読者を育成することにつながると考える。

支援を得て作成したいのが、読書指導の年間計画である。調べ学習の基礎・基本の学習内容を具体化する時、学校図書館司書補の知識が必要である。

##### (2) 情報センターとしての選書

残念なことに、実践した時には、関連する写真集や朗読CDなどは、学校図書館には置かれていなかった。教師の教材研究力に任されている状況であった。子どもたちは、絵本から文庫本まで用意すると、自分に合った本を選書するので、関連する写真集や朗読CDをも学校図書館に設置し、多角的に作品世界を味わうことができる環境を作りたい。教員が手に取ることができるようにすれば、教材研究がより一層しやすい環境になるだろう。それが、情報センターとしての役割をもつ学校図書館なのではないだろうか。若手教員が多くを占める学校では、働き方改革の一助ともなるだろう。

##### (3) 子どもたちの主体性の育成

また、基本的には、教師が見通しをもって、学校図書館の配当時間に並行読書させたい図書を子どもたちに選ばせておくのだが、時としてうまくいかないことがある。授業中、図書で調べたくなったら、配当時間でなくても自由に学校図書館に行って調べられるように学校で共通理解を求めたい。子どもたちが、公共図書館を利用する時のように、静かに本を選んで、借りて、教室に戻ることができるように育てたいものだ。

#### 【参考文献】

- ・小学校学習指導要領、文部科学省（平成20）
- ・小学校学習指導要領 解説 国語編、文部科学省（平成20）
- ・小学校学習指導要領、文部科学省（平成29）
- ・小学校学習指導要領解説 国語編、文部科学省（平成29）

- ・『児童文学—はじめの一步』三宅興子・島式子・畠山兆子（1983）世界思想社
- ・「人が生きるとは」長谷川栄子他『〔実践国語研究別冊 1996年版 NO.164 読者としての子どもを育てる文学の授業集成2—理解指導と読書指導の統合—』井上一郎編著／全国国語教育実践研究会編集（1996）明治図書
- ・「ファンタジー世界に浸る」長谷川栄子『国語力の基礎・基本を造る—創造力育成の実践理論と展開』井上一郎編著（2004）明治図書
- ・『物語とふしぎ』河合隼雄（1996）岩波書店